

「初等教科研究（外国語活動）」の授業評価

英語教育講座・池野修

1. 授業の概観

「初等教科研究」は，教育実習を終了した3回生に対して開講されている授業であり，「教育実習前に受講した初等教科科目並びに教育実習の経験を踏まえ，少人数での講義，実験，実技，模擬授業等を通じて，教科の専門的知識や技能を発展的に学習し，初等教科の教材研究や学習指導法について理解を深める」ことをねらいとする科目である。受講生は，学期前半／後半にそれぞれ開講される5科目程度の中から，それぞれ1つを選択し受講する。選択肢となる科目の中に，今年度初めて「外国語活動」が加わり，私が全6回分の授業を担当した。今年度のこの授業の受講生は11名であった。

「初等教科研究・外国語活動」は，小学校外国語活動を担当する教員に必要とされる知識・技能の獲得をねらいとする講義・基礎的演習であり，実際に様々な英語活動を体験しながら，留意すべき点を考察したり，受講生自身がミニ模擬授業を構想・実施・省察するという内容を持つ授業とした。この授業の目標は次の4つである—この授業の終了までに，受講生は，

- (1) 小学校英語活動がこれまでにどのようになされてきたか，「外国語活動」がどのような理念と内容を持つものなのかを理解している。
- (2) 様々なタイプの小学校英語活動の活動を体験し，明確な活動イメージを持つことができるようになっていく。
- (3) 「外国語活動」の実施上の留意点を理解している。
- (4) 「外国語活動」を模擬的に実施するという体験を通して，外国語活動についての基礎的実践知を育むことができている。

2. 授業評価法

授業の成果と課題についての情報を得るねらいで，最終授業で受講生にアンケートを実施した。アンケートは5問からなり，(1) 授業の目標の達成度について，(2) 「外国語活動」に関する知識・態度・技能に関する受講前／後の変化について，(3) 授業で扱った内容の重要性について，(4) 授業の改善への具体的提案について，(5) その他の感想，という内容である。以下では，(1) (3) (4) の

結果を中心に報告と考察を行うことにする。

3. 授業評価結果

まず，本授業の目標（「1. 授業の概観」のセクションを参照）がどの程度達成できたかについて，「1」（＝全く達成されなかった）～「5」（＝十分に達成された）の5件法尺度アンケートで，受講生に評価してもらった。結果は次の通りである。

	1	2	3	4	5
(1)	-	-	-	9	2
(2)	-	-	2	6	3
(3)	-	-	1	9	1
(4)	-	-	2	6	3

回答は「4」にまとまっており，受講生の認識としては，目標はおおよそ達成されたということになる。なお，特に目標(2)～(4)については，この授業でどのレベルまでの到達を目指すのかについて，これ以後明確にしていかなければならない。

次に，扱った授業内容に対する重要度について，「1」（＝全く重要でない）～「5」（＝大変重要である）の5件法尺度の質問を用いて，受講生に判断を求めた。結果は次の通りである。

	1	2	3	4	5
(a) これまでの小学校英語の概観（研究開発校時代～総合学習における英会話～中教審答申～現在）	-	1	3	6	1
(b) 学習指導要領の「外国語活動」の内容の理解	-	-	-	7	4
(c) 様々な英語活動の体験および考察	-	-	-	2	9
(d) 「外国語活動」実施上の留意点の理解	-	-	-	4	7
(e) 『英語ノート』の1レッスンの体験および考察				8	3
(f) 英語発音基礎についての理解および練習	-	-	-	3	8
(g) 基本的なクラスルーム・イングリッシュの練習	-	-	-	3	8
(h) 受講生による模擬授業の実施および考察	-	-	-	2	9

結果が示しているように、(a)「これまでの小学校英語の概観」に対しては、「2」や「3」を選択した受講生も存在しており、他の内容に比べると重要であるという認識は低い。しかしながら、「小学校外国語活動」がなぜ指導要領で示されたような内容になったのかを的確に理解するためには、それまでの経緯 (e.g. 「総合学習での英会話」の成果や明らかになった課題、中教審での様々な議論) を知っておくことが必要であり、この内容は非常に重要であると授業担当者は考えている。受講生がこの内容を扱う意義をより明確に理解できるように、来年度は情報提示の仕方等を工夫するつもりである。

その他の内容については、おおむね重要度が高いと認識されたが、特に (c) 様々な英語活動の体験、(f) 英語発音基礎についての理解および練習、(g) 基本的なクラスルーム・イングリッシュの練習、(f) 受講生による模擬授業といった、いわゆる「実技」系の内容については、大変重要であると評価されている。

これは、この問いの後、自由記述の形で求めた回答の結果とも一致している。上記 (c) については、第2回目～第4回目の授業において、担当教員が準備した7種類の英語活動例 (+『英語ノート』のあるレッスンにある活動) を受講生に実際に体験してもらった。それらに対して、「[この授業を履修する前までは] 紙媒体のものが多く、実際の活動をイメージしづらかったりしましたが、実際に自分がやってみたり児童役になることでたくさん気づきがありました。」や「自分でも活動を体験することで、子どもたちがどのようにその活動を行うのか具体的にイメージができました。」などに代表される回答が多く見られる。今回実施した活動体験型の授業は、授業者の意図通りの評価を得ていると言える。

また、授業の1回分を使って英語発音基礎のトレーニングとクラスルーム・イングリッシュ (教室英語) の練習を行ったのであるが (上記の (f) 及び (g))、これについても、ある受講生は「教育実習で特に自信が持てなかったのがやはり発音だったので、1コマしっかりと練習をしていただいたことはありがたかったです。」と述べている。この内容は、元々は小学校現職教員研修向けに開発した内容を作り直したものであり、英語の音を楽しみながら練習できる諸活動を盛り込んでいるプログラムである。なお、「発音練習はもう少し早い段階で実施してもらってもいい。後々授業の中で練習できるから。」というコメントもあり、次年度はこの可能性も検討したいと考えている。

もちろん、「初等教科研究 (外国語活動)」は、

今回初めての実施ということもあり、いくつかの課題も残った。4つ目の質問である「改善への提案」への受講生の回答には、「総合としての国際交流と高学年からの外国語活動との関連について知りたかった。」「実際の小学校で行われている活動をビデオなどで紹介してくれたらなと思いました。実際に授業を受けている子どもの表情や様子を知りたかったです。」「ALTの先生とどのように連携したらよいかとか学べると良い。」なども含まれている。これらの内容は今回ほとんど全く扱っておらず、来年度以降の検討事項としたい。(ただし同時に、全6コマという制約の中で、どのような内容を優先的に扱うのかについては考えてみなければならない。)

第2回目と第3回目の授業で扱った「外国語活動実施上の留意点 Part I & Part II」(合わせて42項目)については、受講生に重要であるとは評価されたが、大学生の現時点ではなく、実践を重ねていくうちによく理解できるようになる内容(項目)もあるはずであり、どの留意点を3年生後学期の時点で提示するのが良いのかについては、もう一度考えてみたい。

最後に、第6回目の授業で行った「模擬授業」については、来年度は時間的にも拡充し、一部はもっと早い段階で実施することも考えている。「模擬授業にもう少し時間をとってもいいのかなと最後に感じました。」という2名の受講生の感想は、授業担当者の実感とも一致している。「外国語活動」のような、受講生自身は受けた経験のない内容については特に、「体系的な知識(理論)→実践」という流れよりも、「体験(及び実践)しながら考察する+(理論的)知識と関連づける」という流れをメインにした方が学習効果は高くなると、授業実施後、そして授業評価アンケートの分析を通して、改めて感じている。

4. まとめ

今年度初めて実施した「初等教科研究 (外国語活動)」は、目標の達成、内容の有用さ・重要性の点ではまずまずの成果をあげ、同時にいくつかの課題も明らかになった。この報告書を、来年度以降の授業改善の最初の一步としたい。また、今回実施した「初等教科研究」は、教育実習を終えた学生があらためて初等教科について学び直す授業であるが、「外国語活動」については、実習前に行っておくべき新たな指導 (あるいは授業) もおそらく必要であろう。この点も含めて、来年度以降、「教員養成課程における外国語活動指導法の授業のあり方」について、総合的に検討していきたいと考えている。